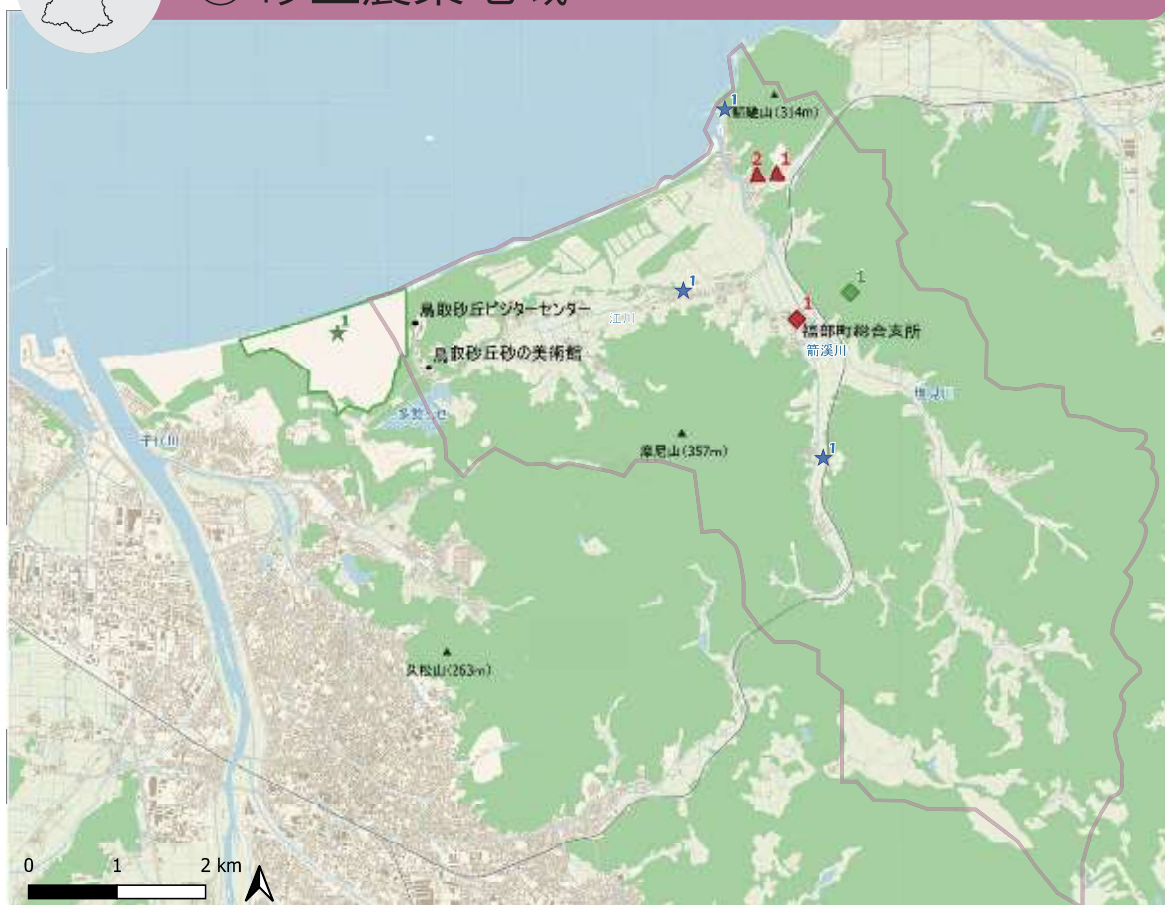


② 砂丘農業地域



● 砂丘農業地域・指定文化財分布図

指定文化財のリストはP102参照



● 駟馳山 (314m)



● 摩尼山 (357m)



● らっきょうの花畑

©tottori.pref.

【地 勢】

この地域は鳥取市北東部に位置し、東側は岩美郡岩美町、南側は鳥取市国府町、北側は日本海に面しています。北西には鳥取砂丘の一部である福部砂丘があり、その後背部には潟湖（ラグーン地帯）が埋積されてできた低湿な平野部が展開しています。北側の日本海以外の三方は山地に囲まれ、隣接する岩美郡岩美町との間には駟馳山（314 m）をはじめ、立岩山（393 m）などの山々が連なり、西側には摩尼山（357 m）、南側には国府町との間になだらかな台地が広がっています。

岩美町唐川に源流を持つ塩見川は町域の東側を流れ、駟馳山南麓で支流の^{やだにがわ}箭溪川、江川と合流し、海に注いでいます。塩見川と箭溪川は山地から平野部までの距離が短く、急に河川勾配がなくなることや前面を砂丘に閉ざされていることなどから大雨になると平野部は度々水害に見舞われています。鳥取砂丘の一部である福部砂丘は東西 4.2 km、南北 1.4 km、最高海拔高度 50.4 mを測り、千代川によって運ばれた砂が強い季節風に巻き上げられて形成されたもので、隣接する浜坂砂丘と合せて日本でも有数の砂丘です。その南西端には堰止湖または^{かいせきこ}海跡湖と考えられる多鯨ヶ池があり、池に流出入する河川はありませんが、雪解け水、雨水、湧水などで一定の水位が保たれています。

【歴 史】

現在の福部砂丘後背地の平野部は縄文海進時には日本海に通じる内湾となっており、そこに面した場所に人々は暮らし始めます。砂丘地の後背地にある直浪遺跡では縄文時代後期を中心に遺物が出土しています。また栗谷遺跡では縄文時代中期から後期にかけての多量の遺物とともに秀麗な木製品が出土したほか、中世に至るまで連綿と人々が暮らした痕跡が確認されています。古墳時代になると平野部を望む丘陵上には古墳群が築かれ、湯山6号墳では短甲や鉄刀、^{こぞねびょうどめまびさしつきかぶと}小札鉾留眉庇付冑などが出土しています。また7世紀前半には、仏教の影響がみられる^{しびつきとうかん}鷗尾付陶棺が出土した蔵見古墳群が築かれています。

戦国期になると丘陵上には多くの山城が築かれ、天正9年（1581）に鳥取城が落城すると、浦富の桐山城城主の垣屋氏の支配下に入りますが、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦で垣屋氏が西軍についたため没落し、池田長吉領となりました。元和3年（1617）には池田光政領となり、寛永9年（1632）池田光仲との国替を経て、以後明治初めまで鳥取藩領となります。砂丘地の南側にあった湯山池と細川池は、江戸時代中期から干拓事業が行われ、現在は水田となっています。

古代の山陰道と考えられる但馬往来が北部を東西に通っており、湯山池の南岸を通る山道通、北岸を通る中道通、砂丘地の海岸を通る灘通の3経路がありましたが、いずれも細川村で合流していたため、同村は宿駅に準ずる扱いを受けていました。

明治29年（1896）に岩井郡と法美郡が合併してできた岩美郡に所属し、昭和3年（1928）、服部村と塩見村が合併して福部村が成立しました。農業を主体としながら、^{いわど}岩戸漁港を拠点とした漁業も行われており、砂丘地では大正3年（1914）に導入されたらっきょう栽培が盛んとなり、平成28年（2016）には地理的表示（GI）保護制度に「ふくべ砂丘らっきょう」として登録されたほか、梨狩りの観光農園地としても栄えています。

【砂丘農業地域年表】

時代	年代	できごと
縄文時代 ～古墳時代	後期	潟湖（ラグーン）の周囲の集落跡である直浪遺跡から、漁撈用の石錘や軽石製の浮子、栗谷遺跡から木製の杓子や植物繊維を使用した編み物などが出土。
	5世紀	湯山6号墳が築造される。
	7世紀頃	蔵見3号墳が築かれる。
古代	養老7年(723)	因幡に4駅が置かれ、当地には佐尉駅がおかれたと比定される。
	承平年間 (931～938年)	『和名抄』が編纂され、当域は法美郡服部郷に比定される。
中世	弘和2年(1382)	服部庄、領家職が兵庫県新温泉町の楞巖寺へ移る（「楞巖寺文書」）。
	応永16年(1409)	服部庄、楞巖寺の領地となる（「楞巖寺文書」）。
近世	慶安4年(1651)	細川が山陰道の駅に指定される。
	元禄14年(1701)	巨濃郡から岩井郡に改まる。
	安政6年(1859)	湯山新田の開発、藩の事業となる。
近代	明治22年(1889)	町村制実施。志保美・元塩見・服部の三村時代。
	大正6年(1917)	志保美村と元塩見村が合併し塩見村になり、服部村との二村時代になる。
	昭和3年(1928)	塩見・服部両村合併し、福部村誕生。
	昭和7年(1932)	湯山池干拓、農地となる。
現代	昭和26年(1951)	福部村農協が誕生し『砂丘らっきょう』のブランドで販売される。
	平成16年(2004)	福部村が鳥取市と合併し、鳥取市福部町となる。
	平成28年(2016)	「ふくべ砂丘らっきょう」・「鳥取砂丘らっきょう」が地理的表示（GI）保護制度に登録される。
	令和元年(2019)	麒麟のまち圏内（鳥取市を含む1市6町）によるストーリーが、日本遺産に認定。

【砂丘農業地域の指定文化財】

※令和3年3月31日時点で、地域内にある指定文化財を掲載。

	No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁
もの	◆	1 保護文化財	栗谷遺跡縄文時代出土遺物一括	福部町細川 福部町総合支所	P19
	▲	1 保護文化財	牛尾大蔵左衛門の五輪塔	福部町細川	P37
		2 保護文化財	子持御前の五輪塔	福部町細川	P38
凡例	◆	鳥取県指定、▲…鳥取市指定			

	No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁
場	★	1 天然記念物	鳥取砂丘	浜坂、福部町湯山	P8
	◆	1 天然記念物	坂谷神社社叢	福部町栗谷	P29
凡例	★	国指定、◆…鳥取県指定			

	No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁
こと	★	1 重要無形民俗文化財	因幡・但馬の麒麟獅子舞	福部町岩戸、海土、箭溪	P4
凡例	★	国指定			

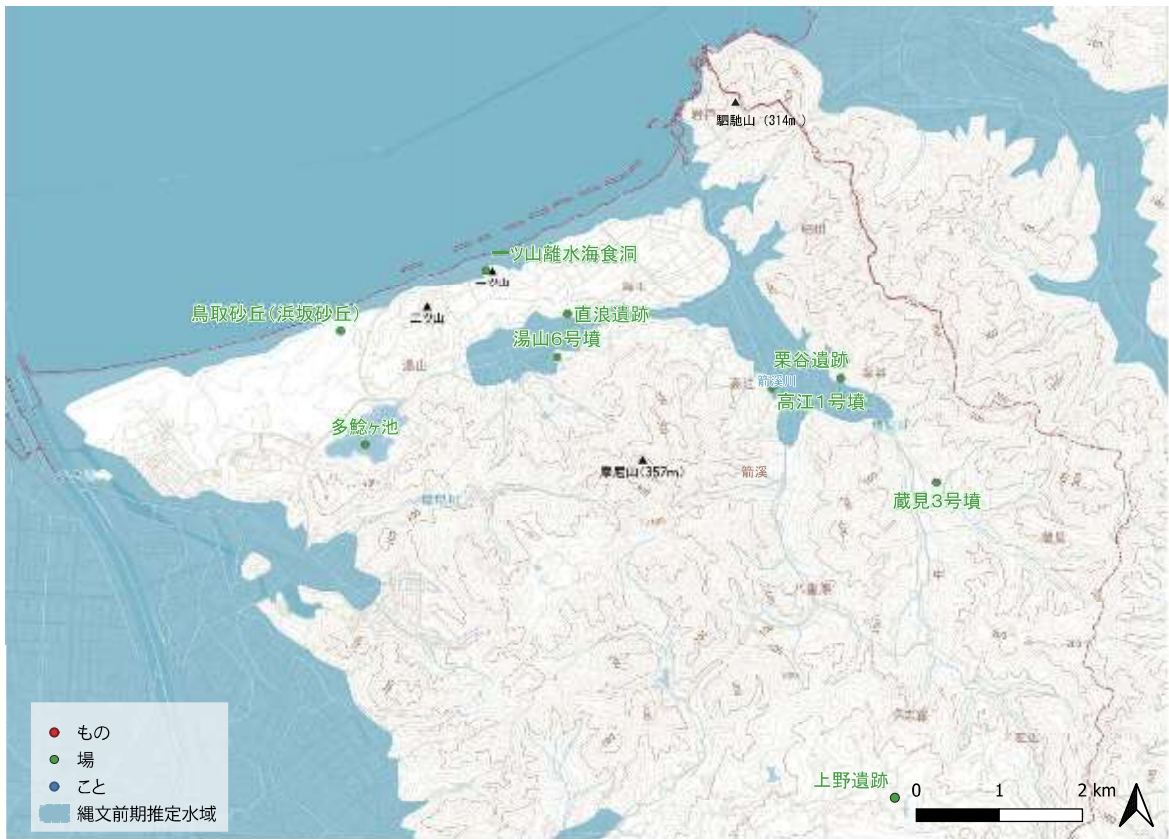
8. 地形の変遷と人々の暮らし

鳥取県を代表する自然遺産である鳥取砂丘。この地域に住む人々は、砂丘の形成・発達の影響を受けながら、様々な努力を重ねて生活してきました。その歴史は縄文時代まで遡ります。

約6,000年前、現在の海岸線から約100m内陸にある福部町湯山の一ツ山の「離水海食洞」の辺りまで海が入り込み、現在の湯山地区や海土地区などの平野部は入海となっていました。その後約4,700年前～3,700年前になると、気候が再び寒冷化したことによって海水面は低下し、海の砂地が陸地となって浜坂砂丘や福部砂丘の原型が形成され、内陸部に入り込んだ入江は、福部砂丘に堰き止められて潟湖（ラグーン地帯）となりました。

縄文時代にこの地に人々が住んだ痕跡である「直浪遺跡」では、漁撈用の石錘や軽石製の浮子が確認され、「栗谷遺跡」からは木製の杓子や植物繊維を使用した編み物のほか、出土した骨類からクロダイやフグ等の魚類、イノシシやシカ等の動物を食べていたことが確認されています。

稲作の伝播とともに弥生文化が開花し、潟湖（ラグーン地帯）の周辺、河川の下流域には、縄文時代から続く栗谷遺跡、直浪遺跡が拠点となり、国府町と接する山間部では上野遺跡などで集落が形成されました。



● 8. 地形の変遷と人々の暮らし ストーリーマップ①
潟湖（ラグーン地帯）と縄文・弥生時代の遺跡及び古墳の分布

古墳時代には、畿内色の濃い「高江1号墳」が築造されたほか、「湯山6号墳」から出土した「小札鋌留眉庇付冑」や、「蔵見3号墳」から出土した「鷗尾付陶棺」などは、遠隔地との交流が盛んに行われていたことを示唆する資料となっています。

その後、千代川によって運ばれた砂と日本海からの季節風によって、砂丘はその範囲を拡大していき、この地域には福部砂丘と浜坂砂丘が形成されました。直浪遺跡からは徐々に拡大していった砂丘の痕跡が認められています。砂に埋もれた地域は不毛の地となり、長らく活用されることはありませんでした。

しかし江戸時代に入ると、砂丘地内は但馬から鳥取城下に至る但馬往来として利用されるようになったほか、「湯山池」と「細川池」と呼ばれる潟湖を農耕地として活用するため、防砂林による飛砂対策と干拓事業が行われ、明治期には福部砂丘地内でらっきょうの栽培に成功し、現在では「ふくべ砂丘らっきょう」としての地域ブランドを確立しました。砂丘に咲く紫色のらっきょうの花は、「鳥取市の花」として親しまれ、この地域の人々が砂との共生に成功した証とも言えます。

また、浜坂砂丘は有島武郎^{ありしまたけお}らの文人の来訪もあって、大正時代頃から地域を代表する観光地となり、今では年間観光客200万人を超える一大観光地となっています。しかし戦後は、砂丘地の開発が進み、浜坂砂丘も防砂林を整備する計画があり、砂丘消滅の危機がありました。地元住民の反対により消滅の危機をまぬがれ、今では「鳥取砂丘」として、昭和30年(1955)に国の天然記念物に指定されました。山陰海岸国立公園の一部であるとともに、平成22年(2010)に世界ジオパークネットワークへの加盟が認定されました。鳥取砂丘の魅力伝える「鳥取砂丘ビジターセンター」では、観光案内や砂丘のガイドツアーが行われています。このほか砂丘地内では、砂丘のなりたちを学習できるほか、らくだ乗り体験、砂丘ヨガ、地形を利用したパラグライダー体験など、観光資源の利用も積極的に行われています。



● 栗谷遺跡出土品一括
(国重要文化財及び県保護文化財)



● 小札鋌留眉庇付冑(県保護文化財)



● 栗谷遺跡出土品(国重要文化財)



● 8. 地形の変遷と人々の暮らし ストーリーマップ②
現代の砂丘地の範囲



● 鳥取砂丘(浜坂砂丘)周辺の景観(国天然記念物)
写真提供:鳥取県文化財課



● 鳥取砂丘(浜坂砂丘)のオアシス

<コラム> 南田石

福部町南田^{のうだ}で産出される南田石^{のうだいし}に代表される緑色凝灰岩は、火山活動によって噴出した火山灰や火山礫・軽石が堆積・固化したものです。加工しやすいことから古くから様々な用途に用いられ、鳥取藩主池田家墓所の石灯笼とその周囲の玉垣、鳥取東照宮の本殿の地覆石^{じふくいし}や玉垣等に用いられています。

※ P109「10.但馬と国府の街道 ストーリーマップ」に、南田石採掘場跡を掲載しています。

9. 砂丘農業発展に寄与した先人たち

この地域の人々は、半農半漁の生活をしていましたが、江戸時代後期には飛砂による被害がひどくなり、人々を悩ませていました。

そんな折、鳥取藩は石高の増進を目的に、湯山・細川池の干拓による新田開発に乗り出します。細川池の干拓は、鳥取藩新田方の治右衛門の采配によって享保年間(1716～1736)に完成しました。

一方湯山池は、飛砂に悩まされる農民の姿を見かねた地元出身の鳥取藩士宿院六平太義般しゆくいんろくへいたぎはんが、自ら鳥取藩に湯山池干拓を願い出て、藩がこれを承諾し大事業が始まります。砂丘からの飛砂防止のための植林、多鯨ヶ池から約300mの流水暗渠の設置に加え、湯山池の地盤が軟弱であったため、埋め立てた場所が沈下して池に戻ることもしばしばで、義般の私財も投じて行われ、完成を見たのは文久2年(1862)のことです。その後も干拓事業は続けられ、昭和7年(1932)に完成し、現在は、農地となっています。

明治から大正期にかけては、佐々木甚蔵ささきじんぞうが「進果会」を設立し、果樹栽培の普及発展のための活動



● 宿院六平太義般 顕彰碑



● 9. 砂丘農業発展に寄与した先人たち ストーリーマップ①:細川池と湯山池の干拓

を行いながら、村内で最初の果樹園を開園し、鳥取の名産品である「梨」などの果樹栽培の基礎を築きました。また鳥取県の補助を受けるなどして砂防垣を築き、クロマツによる防砂林の整備も行っています。その成果として、現在では県道265号に多くの梨園と売店が並び、「ふくべ梨狩り街道」として、観光名所となっています。

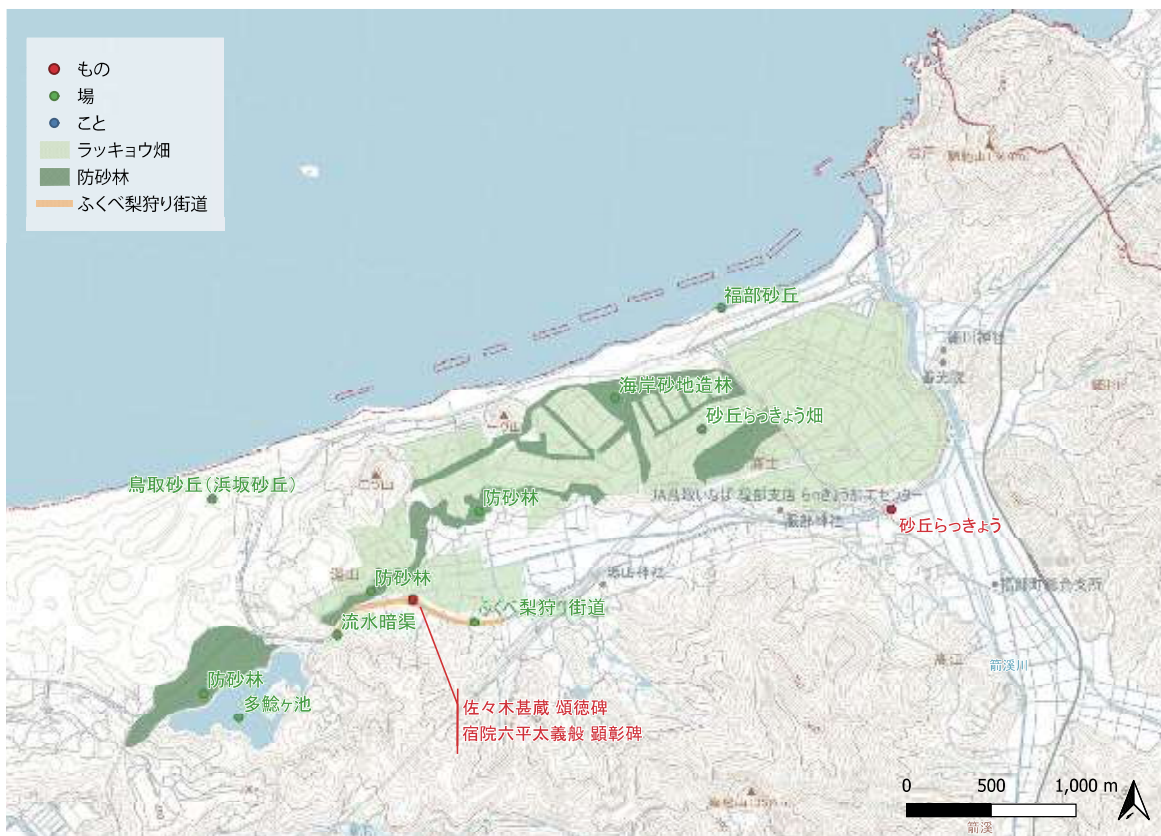
また濱本^{はまもと}四方蔵^{よもぞう}は、佐々木甚蔵とともに約15haの砂丘畑の開墾を行って、らっきょうや桑の栽培を始めた人物で、大正期に砂丘内の畑でらっきょう栽培を成功させ、その成果は現在「ふくべ砂丘らっきょう」という地域ブランドとなり、本市を代表する農産物となっています。



● 福部の梨園



● らっきょう畑



● 9. 砂丘農業発展に寄与した先人たち ストーリーマップ②: 福部砂丘とらっきょう畑

10. 但馬と国府への街道

古代から中世まで因幡国庁が置かれていた法美郡。その一部であったこの地域は、「法美郡服部郷」とされていました。この頃は日本海と繋がる入江があり、因幡国庁の海の玄関口として機能していたと考えられ、日本海からの物資や人の往来は、山間の峠道を通して国府へ抜けていったと考えられます。

古代からの因幡国府との繋がりは、有名な「おたね伝説」の中にも見受けられます。法美郡服部郷出身の美しい少女おたねが奉公していた先は、法美郡宮下（現国府町宮下）の豪商でした。若者がおたねをこっそり付けていった道は、古代から伝わる街道だったのかもしれませんが。

応仁の乱が勃発した戦乱の頃には、「二上山城」（岩美町岩常）を居城としていた山名勝豊が因幡国の守護となると、湖山池のほとりの布勢に天神山城を築きます。

但馬往来は入江付近から榎峠を越えて鳥取平野へと繋がり、山名家家臣塩見源太頼重は街道と箭溪集落を見下ろす丘陵に築かれた「蛇山城」を居城とし、その子である塩見左近長頼は「瀧山城」に入り、山名氏への忠勤に励みました。

一方但馬往来が延びる細川は、古代から駅家が置かれたといわれる交通の要衝で、その役割は江戸時代まで続きました。鳥取藩の庇護を受けていた「善光院」は街道沿いに移築され、現在に伝わります。また山名数豊の急襲によって落城した岩美の道竹城から、この地に逃れてきて亡くなった子持御前を弔う五輪塔や、羽柴秀吉の鳥取城攻めで吉川経家側につき、秀吉との戦で戦死した牛尾大蔵左衛門春重を弔う五輪塔が但馬往来沿いに残っています。

<コラム> 多鯨ヶ池

鳥取砂丘の南側にある多鯨ヶ池は、かつての谷が砂丘の形成によって塞がれてできた池です。東～南側の山地と北側の砂丘に囲まれた池内には小島、磯の御前島、沖の御前島の三つの島が浮かびます。

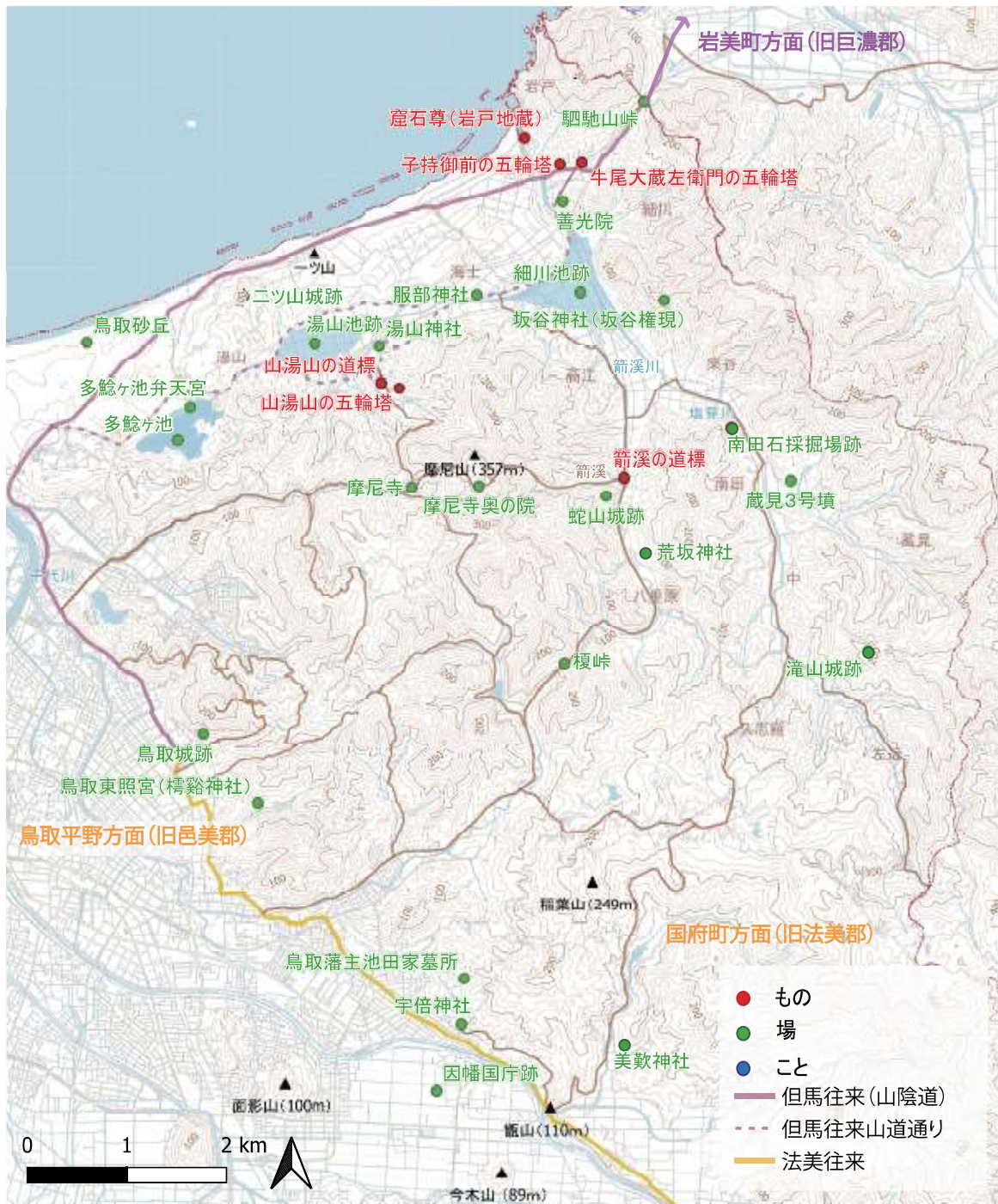
主な流入・流出する河川を持ちませんが、透明度の高い水を湛えその水深は 15.1 m を測り、山陰地方最深の池となっています。

湖山池や水尻池などの潟湖とは違った特徴を持っており、池底には約 5 万 5 千年前の大山噴火によって降り積もった「大山倉吉軽石層」が不透水層の役目を果たしていて、水漏れを防いでいると考えられています。

平成 13 年 (2001) には、環境省の「日本の重要湿地 500」に選定されています。



● 多鯨ヶ池



● 10. 但馬と国府への街道 ストーリーマップ



● 摩尼寺 本堂
(国登録有形文化財)



● 服部神社



● 善行院

11. 海辺の信仰と伝承

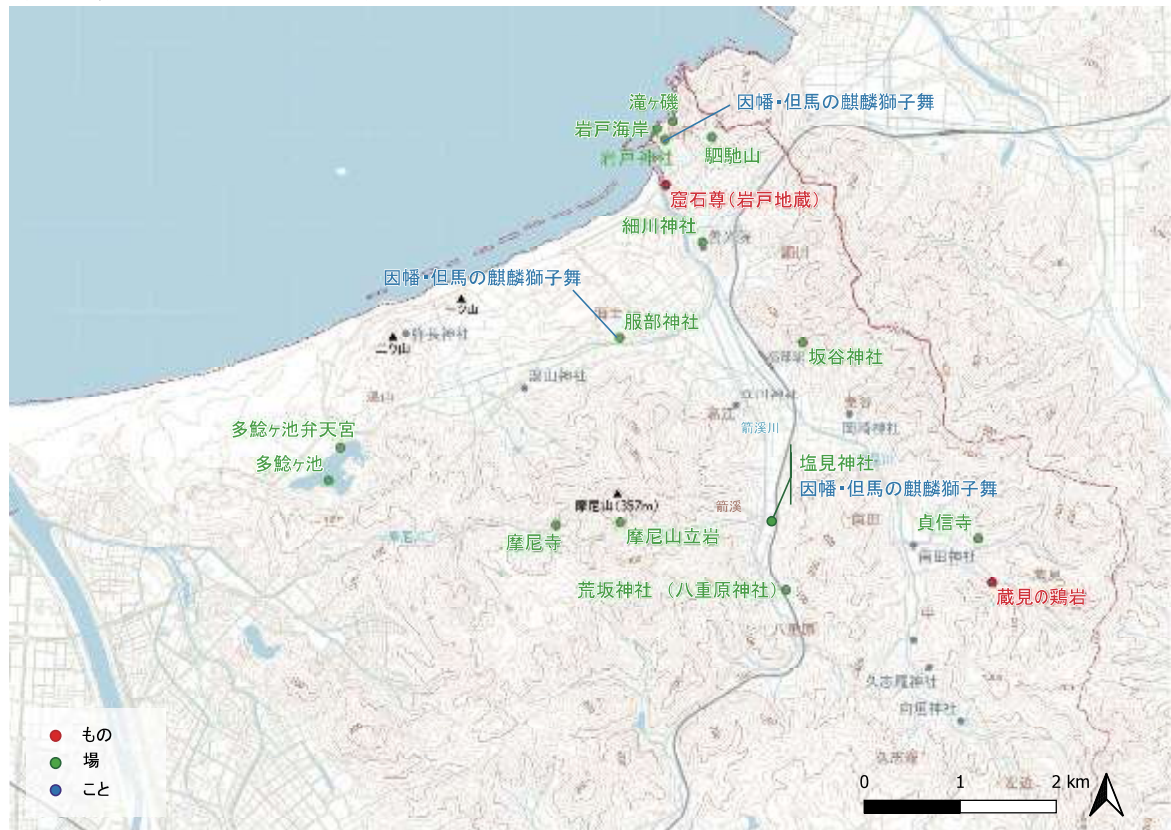
鳥取砂丘の東端岩戸付近の海岸には、海の浸食によって形成された海食地形や、溶岩流が急速に冷えて固まることにより形成された滝ヶ磯の柱状節理など多様な海岸地形が見られ、内陸部には巨岩・岩窟等から成る奇景や、日本海・鳥取砂丘等を一望する鷲ヶ峰のある摩尼山など自然が創り出した優れた景観が見られます。

先人たちはその景観に畏敬の念を抱き、大山・三徳山と同様に、霊峰として摩尼山は信仰の対象となりました。承和年間(834～848)に慈覚大師が摩尼山の山腹に天台宗の摩尼寺を建立して堂宇を構え、山頂の立岩と呼ばれる巨石や奥の院などが信仰を集めました。このほか、海食洞内に置かれた窟石尊(岩戸地蔵)、滝ヶ磯の柱状節理の上に鎮座する岩戸神社や巨大な岩窟に鎮座する坂谷神社など自然の名勝地と結びついた信仰の地が多く見られます。

承応元年(1652)因幡東照宮勸請を盛大に祝う権現祭に登場した麒麟獅子舞は、式内社である服部神社や、古代から駅家が置かれたといわれる細川に鎮座する細川神社などに伝わっており、現在でも猩々と共に重厚な舞いを披露しています。

また砂丘の南側で水を湛える「多鯨ヶ池」は、その神秘的な美しさから「おたね伝説」を今に伝えています。美しい娘がこの池に住む白蛇であったとされるこの伝承は、多鯨ヶ池の名前の元にもなっており、おたねさんは今も「多鯨ヶ池弁天堂」に祀られ、美しい池を見守り続けています。

この他にも、摩尼山の「不動岩」や「立岩」といった巨岩に住むといわれる山姥のほか、「蔵見の鷄岩」の中には金の鷄が住むとされ、この地域の自然の地形と深く結びついた伝承が今でも語り継がれています。



● 11.海辺の信仰と伝承 ストーリーマップ



● 岩戸神社



● 多鯰ヶ池



● 窟石尊(岩戸地蔵)



● 坂谷神社(坂谷権現)

<コラム> おたね伝説

国府町宮下の長者の家に女中として働いていた「おたね」が、いつも甘く美味しい柿を持ってくるので、不信に思った若者たちが後をつけたところ、おたねが白い大蛇へと姿を変え、多鯰ヶ池の中の小島にある柿の木によじ登り、柿を取っていたという話。

この話は、別のストーリーもありますが、いずれも多鯰ヶ池と「多鯰ヶ池弁天宮」に通じるものとなっています。



● 多鯰ヶ池弁天宮